

集落の規範意識・慣習からみるサステナブルコミュニティの理想に関する基礎的研究 —大分県姫島村におけるケーススタディー—

正会員○安藤万葉*1 同 姫野由香*2 同 牛苗*3 同 林孝茂*1
同 西悠太*1 准会員 濱田菜波*4

7. 都市計画—4.地区とコミュニティ 都市計画 サステナブルコミュニティ

1 研究の背景と目的

日本の近代都市計画は、欧州の国土・地域計画に多大な影響を受けているが、歴史的な背景や制度体制だけでなく、地理条件等の違いから、わが国との「距離」を感じるのも事実である。

一方、日本においても国土計画のトピックスとして、コンパクトシティや職住近接、交通ネットワークによる徒歩圏構想等が挙げられる。しかしこれらは、古くから残る日本の集落においても叶えられていたのではないだろうか。

特に離島地域は、地理条件により、周辺の影響を受けにくいこと、固有の資源や暮らし方、文化等により諸問題を独自に抑制・解決してきたと考えられる。よって、離島地域には、現在まで育まれてきた、独自の地域コミュニティがあるのではないかと考えられる。

このような原則を具現化させるためには、地域が如何なる方法で、維持や変容を遂げてきたかを明らかにする必要がある。

先行研究として、山村ら¹⁾は近代に提唱された都市論で示された要件をまとめ、離島の集落構造について考察している。大堂ら²⁾は近代に提唱された都市論と集落地理学の双方の視点から、集落構造を分析評価している。しかし、集落構造などの社会共通資本の分析は行われているが、生業や生活を続けてきた仕組みや慣習、それにより形成された地域運営に関する共同体などの社会関係資本の分析はなされていない。

そこで本研究では、離島集落において現在まで継承されてきた生活・生業や、集落環境の持続性に関する規範意識や慣習などを明らかにすることを目的とする。

2 研究の方法と対象地域

2-1 研究の方法

本研究では、まず離島集落における生活・生業に関する規範意識や慣習等の社会関係資本を調査する。そ

して既往研究で明らかとなった、集落構造の変容過程などの社会共通資本と照合する。最終的に、社会関係資本・社会共通資本の両面から、日本の集落におけるサステナブルコミュニティの要件を導出することを目標とする。

まず、研究対象地域である大分県姫島村の基本属性や生活基盤、産業等の現況を把握する。次に文献調査やヒアリング調査により、集落における、生活・生業に関する規範意識や慣習等の社会関係資本に関する評価指標を抽出し、整理を行う。

2-2 研究対象地域

大分県姫島村は、瀬戸内海の西端、国東半島の北約6kmに位置する離島である。また、瀬戸内国立公園の一部でもある。1975年に離島振興法の適用地域に指定され、生活産業基盤の整備などが積極的におこなわれてきた。現在も一島一村による地域運営を継続している離島である(図1)。

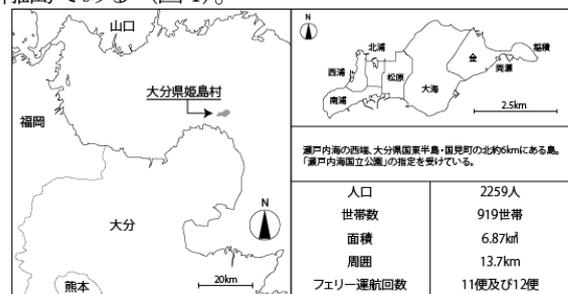


図1 姫島村の位置とその概要(2015年4月現在)

3 姫島の経年変化にみる離島の状況

姫島の現況を把握するために、本研究では【基本属性】、【生活基盤】、【産業構造】、【行政施策】の4つの指標を設ける^{注1)}。これらについて、1975年から2015年の各指標の経年変化を分析した。図2~6は、離島統計年報^{3) 4) 5) 6) 7)}から収集したデータを集計したものである。

【基本属性(図2)】人口は1990年頃まで3400人程度を維持していたが、それ以降は減少傾向にある。世帯

The ideal of sustainable community based on the settlement's model awareness and custom

-A case study on Himeshima village, Oita Prefecture-

ANDO Mayo, HIMENO Yuka, NIU Miao, NISHI Yuta, HAYASHI Takashige, HAMADA Nanami

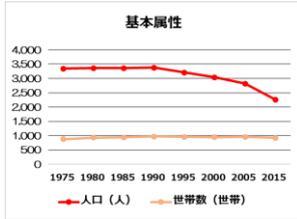


図2 基本属性経年変化

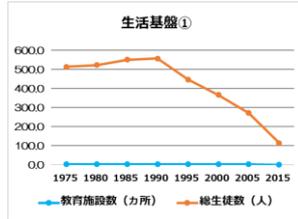


図3 生活基盤経年変化①

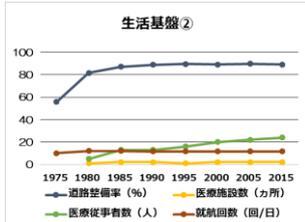


図4 生活基盤経年変化②

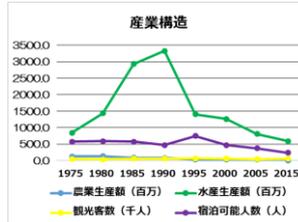


図5 産業構造経年変化

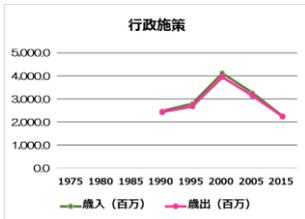


図6 行政施策経年変化

から1995年にかけて、約33億円から約14億円と大幅に減少している。これは高齢化や、人口減少による人手不足に加え、魚の減少により衰退していると考えられる。観光に関する指標はともに停滞・減少傾向にあり、全体的に産業は衰退していると考えられる。

【行政施策(図6)】歳入・歳出ともに2000年頃をピークに減少傾向にある。一島一村の姫島村では、市町村合併により、財政状況の豊かな本土の市町村の数値が採用される等の影響は受けていないと考えられる。

4 慣習・規範意識の評価指標の抽出・定義

離島地域は、自立的な地域として現在まで成立してきた。その背景には、地理的特性だけでなく、地域の歴史、文化、風土等の島独自の社会システムがあったと考えられる。これらを把握することで、人口や世帯数を維持し、生活基盤、産業構造等を支えながら、これまで生活や生業を継続することができた仕組みを、明らかにできるのではないかと考えた。そこで、離島集落において、昔から続く規範意識、慣習等の島を支えてきた社会関係資本を整理・分析することで、サステナブルコミュニティの要件を把握したいと考えた。

まず、全国の離島や集落において、【基本属性】、【生活基盤】、【産業構造】、【行政施策】の項目が、昔から続く慣習などにより、増加または維持している事例の収集^{8) 9) 10) 11) 12) 13)}を行った。その結果、【基本属性】

(人口・世帯数)、【産業構造】(農業・漁業)に関する事例が多くみられた。

次に、それらの事例から、キーワードとなる項目を抽出すると、「土地や家屋の問題」、「連帯感・仲間意識」、「産業と担い手の問題」、「困窮対策」などが挙げられた(表1)。また、これらの項目をⅠ生活、Ⅱ土地・家屋、Ⅲ産業に分類し、内容をまとめた(表2)。

世帯あたりの人口が減少していると考えられる。

【生活基盤(図3~4)】教育に関する指標である生徒数は、1990年頃まで約500人を維持していたが、2015年には約100人まで減少している。一方で、教育施設数は現在まで一定である。医療に関する指標である医療施設数は一定であり、医療従事者数は増加傾向にあるため、医療体制が進んでいると考えられる。交通に関する指標は、道路整備率は1975年から1980年にかけて、約60%から約80%に増加したのち、一定である。航路回数も、約12回/日を維持しており、ともに安定して維持していることがわかる。

【産業構造(図5)】漁業や農業に関する指標は、ともに減少傾向にある。特に漁業の水産生産額は、1990年

表1 基本属性・産業構造に関する増加、維持事例

関係項目	No	文献タイトル	内容	明らかになったこと	キーワード	共通
基本属性・産業構造	①	人口増加を続けてきた坊勢島の居住システムの考察	人口増加に関する慣習と、人口増加を収容してきた居住システムについて明らかにしている	・人口増加の制約を緩和する特徴として、産業構造の転換と、埋め立てによる住宅用地の確保、インフラ整備がある ・内発的に人口増加を促進する特徴に、「新宅分け」という民俗慣行がある ・島全体での住宅、宅地といった資産の流動性が高く、約1割の住宅の余剰を利用して、居住者は島全体を頻りに入れ替わり居住している	「土地や家屋の問題」	規範意識・慣習
	②	坊勢島におけるライフステージに応じた地域内転居システム	人口収容を可能にしたライフステージに応じた地域内転居システムについて明らかにしている	・「新宅分け」に限らず、子供の成長や同居などのライフステージに転居することで、適切な住宅や宅地を得ている傾向がある ・同一の住宅、宅地を異なる家族が連続的に利用している ・ライフステージから外れた独居者も、住宅、宅地の連続的な利用に関わっている ・島独自の経済的な仕組みによって成り立っている	「土地や家屋の問題」	
	③	ライフステージ毎にみた坊勢島における女性の交流の特徴-人口増加を続けてきた坊勢島にみる地域社会の持続に関する研究-	坊勢島における女性の交流に着目し、ライフステージごとの交流の特徴を明らかにし、それを踏まえ、坊勢島における人口増加や継続的な居住と女性の交流との関係について考察	・親族を中心とした、頻りにお互いの家庭を訪問し合うという交流によって、おもに女性たち同士で育児を直接的間接的に支えており、このような人間関係によって子育てしやすい環境が形成される ・「新宅分け」により新居を構えやすい状況がある中で、親族を中心とした育児の支援が受けられる	「連帯感・仲間意識」	
	④	福岡県小島漁業コミュニティにおける世帯再生産メカニズム	戦後、人口や世帯数が再生産されている小島島を取り上げ、具体的にそのメカニズムを明らかにする。特に、世帯再生産に注目し、それに関わる経済的要因と社会的要因の双方から分析を行う。	・世帯維持に対する「長男＝跡継ぎ」という規範意識が強い ・世帯主の兄弟(他出すべきもの)も労働力として確保 ・島内婚が主流	「産業と担い手の問題」	
	⑤	北上山地の奥地山村集落における世帯の構成とその再生産プロセス	岩手県の4集落を事例にとり、世帯構成の状況把握、並びに世帯の再生産プロセスの復元を通じて世帯維持の要因を明らかにしている	・世帯構成は同居または半同居が過半数に達し、転出は多く見られない ・ライフサイクルに応じた就労場所の移動と転換 ・所有土地(資産)の大きさと集落内の「連帯・仲間意識」が世帯維持の重要な要因	「連帯意識、仲間意識」「産業と担い手」「土地や家屋の問題」	
	⑥	日本の離島 第2集	戦後わずかの間に貧窮漁村になった玄海島で行われた徹底した緊急政策	観光行事から産業、日常生活に関する細かい制限を設け島民も忠実に守っていた	「困窮対策」	

表2 規範意識のキーワードとその内容

規範意識・慣習	分類	項目	内容
	I 生活	「連帯感・仲間意識」「困窮対策」	住民同士の相互扶助に関する慣習について 島での困窮時の対策について
II 土地・家屋	「土地や家屋の問題」	島内の土地や家屋に関する慣習について	
		「産業と担い手の問題」	・農業や漁業に関する慣習について ・就労の場や後継者の確保について ・農業や漁業に関する規制や独自のルールについて

5 姫島村の集落を支える社会関係資本の把握

4章で明らかになったI生活、II土地・家屋、III産業の3つの分類ごとに、姫島における社会関係資本について文献調査と、ヒアリング調査を行った。その結果を表3、図6に示す。

【生活】連帯感や仲間意識に関する慣習では、葬式の際に地区でお金を出し合う『無常講』という慣習がある。以前は、亡くなった人の近隣の家に無常講の世話人や隣保班の人が集い、葬式の準備をしたり食事を作ったりしていた。しかし、外に出て働く女性が増えたため、5~6年程前から集まる場所は公民館となり、食事も仕出し屋に頼むように変化してきている。しかし現在でも、隣保で集まり、食事の準備をしている班もある。『無常講』のほかにも、金毘羅講などがある。これは、船下しの際にその船に乗り、金毘羅山までお参りに行くという慣習で、30年程前まで行っていた。また、姫島村には1928年まで『若者宿』というものがあった。これは、現在の公民館のことである。当時一家庭における子どもの数が多く、部屋が足りなかったため、中学を卒業した頃から若者宿で同世代の子と遊んだり、寝泊をしていた。また、若者宿は夜警や火番も行っており、先輩後輩等の上下の関係を学ぶ場でもあった。

祭事関係では、『船曳祭り』、『盆踊り』、『荒神祭り』などがある。船曳祭りと盆踊りは姫島を代表とする祭

表3 姫島村でのヒアリング結果まとめ

規範意識・慣習	項目	期間	内容	エリア
	【生活】	連帯感や仲間意識に関する慣習 (相互扶助)	~現在	『無常講』 (無常講)：葬儀の際、費用を出し合う互助組織。無常講の世話人や隣保班で集まりお葬式の料理なども作っていた。香奠は米一升十円一千五百円と変化してきている。(大海)
不明			その他の講 (諸種の講)：部落の家々がほとんど加入している講(庚申講・エビス講)その他にも、子安講・金毘羅講・伊勢講などがあった	
~昭和3年			『若者宿』 (若者宿)：中学卒業した頃から、男同士で、若者宿(公民館)で寝泊りしていた。当時は家に子どもも多く、部屋もなかったため若者宿で同世代の子と遊んでいた。	
~現在			『船曳祭り』 ・毎年各区で持ち回りの祭事。大帯八幡社から舟を曳いてまわる。 『盆踊り』 ・姫島村の無形文化財にも指定されている。8月14日~17日に各区の盆坪(公民館の前)で行われている。盆坪の位置は公民館の移動に合わせて変化してきている。 『荒神祭り』 ・大海地区独自のもの。クジで座元を決め、世話人と一緒に甘酒を作る。祭りが終わると、座元の家で直会を開く。現在は公民館で行われている。	
不明			困窮時に行っていた対策 ・自給自足の生活ができていたため、島全体で困窮に陥った時代はなかった ・漁ができない季節に出稼ぎにでる家庭もあった。	
【土地・家屋】	土地や家屋に関する慣習 (財産・土地の分割)	~現在	『隠居』 ・長男が結婚すると親夫婦が隠居屋へ移る(家族が多い場合は、夫婦の方が隠居屋へ移ることもある) ・隠居して数年後に息子夫婦にヨワタンをする	島全体
		不明	『分家慣行』 ・長男が本家を相続する。次男が結婚すると、家を別にして、分家するのが慣習 ・財産や土地を持っている家は、次男夫婦にも土地を用意する場合もある ・分家の家屋敷は本家で面倒をみるその上田畑・山林まで分ける。	
【産業】	産業(漁業、農業、畜産)に関する慣習	不明	・漁業や船乗りは男性、農業は女性が行うのが一般だった。	島全体
		~現在	『乗り初め』 ・一年の漁の初めの日に、恵比須社にお神酒や料理をもってお参りに行く。大漁旗を掲げ、船をはしらせる。その後は公民館などで打ち上げをする。	
	不明	・家族で船に乗り漁業をしているケースが多い。夫婦船等(現在でも) ・昔は舟子(自分で船を持ってない人)を雇っていた。 ・舟子や親の手伝いをし、お金をため、船を埋やしていった。 ・長男が家の仕事を継ぐことが当たり前という思想があった。 ・家のことを思っ進学を諦める場合や、どうしても島を出たい場合は、次男として名前を変えて出ていくケースもあった。		
	明治19年~現在 明治34年~昭和24年頃	『漁業期節』 ・姫島の漁業の特色の一つ。「共第8号漁業権行使規約」をえ定め、乱獲を避けている。明治37年から文章化され、期節は毎年総会によって決定 『旅漁』 (旅漁 たびりょう) 姫島独自の言葉。姫島を離れて、他地区で漁業に従事すること。1.2年でやめているケースも多いが、姫島にいても魚の獲れない時期に旅漁で生活を支えていた		

事でもあり、準備から祭事後の直会まで、各地区の公民館が使用される。船曳祭りは各区で、持ち回りで主催する祭事であるため、6区ある姫島では、6年に1度のペースで担当となる。20~30年程前までは、その年になると、島を離れた子ども達なども呼び、島中が盛り上がっていたという。荒神祭りは、大海地区だけに伝わる祭事で、毎年くじで座元の家を決定し、6名の世話人と共に甘酒を製造していた。20年程前から、甘酒を製造する場が座元の家から公民館へ移っている。

困窮時に行っていた対策は、半農半漁で自給自足の生活が成立していたため、これまでなかった。農業では、芋や麦を主に作っており、芋は山に穴を掘り保管したり、自宅の客間の下などにも保管していた。漁業では、漁ができない期間に、島外に出稼ぎに行っていた家庭もあった。

【土地・家屋】長男が結婚すると、両親が母屋を息子夫婦に譲り、隠居屋へ移るという慣習が存在している。年齢の近い弟妹がいる場合は、長男夫婦を先に隠居屋へ入れ、後に寝所を交換する方法もあり、現在もこの慣習は残っている。しかし、跡継ぎ夫婦が島にいないため隠居できないケースや、母屋と隠居屋を、廊下などで繋ぎ、2世帯のように暮らすケースなどに変化してきている。また、長男が本家を相続し、次男は結婚するとすぐに分家する慣習もある。しかし、結婚してもすぐに家を建てることができないため、最初は村営住宅や貸家で生活することが多かった。また、村が塩田跡地を買い取り、次男坊住宅として、次男に安く土地を提供していた。財産分けについては大海地区では、

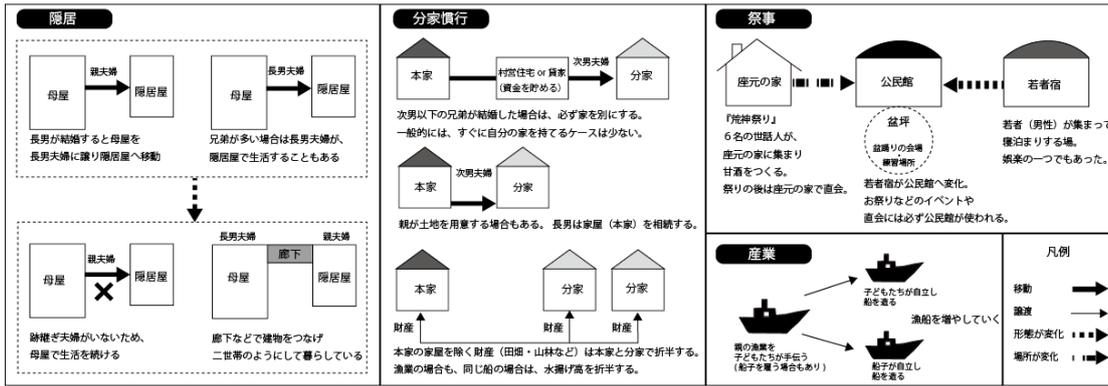


図6 慣習と建物との体制図

長男が本家を相続し、残りの財産を本家と分家で折半するのが一般的であった。分家してもすぐ土地の名義変更をしないため、税金や交際費等が本家より軽減され、分家は本家より暮らしやすいといわれていた¹⁴⁾。

【産業】 姫島では、漁業や船乗りは男性、農業は女性が行うことが一般的であった。漁業に関する祭事の『乗り初め』は全地区で現在まで続く慣習である。毎年1月2日に、恵比須社で一年の豊漁を祈り参拝する。

就労の機会や後継者の確保については、姫島では家族で船に乗り漁業をしていた。50~60年前の船は、設備が充実していなかったため人手が必要で、家族だけでなく、自分の船を持つことのできない船子も雇って漁業を行っていた。船子もお金が増えたと自分の船を持ち、船が増えていった。しかし、20年程前から漁獲量の減少により、水産生産額も減少し(図4)、漁業だけで生計を立てることが難しくなったため、跡継ぎが激減した。また、姫島では、長男子相続が原則である。そのため、魚が多く獲れていた20年程前までは、跡継ぎを確保できていた。

産業に関する独自の規制やルールとして、『漁業期節』^{注2)}と『旅漁』^{注3)}がある。ともに、姫島の漁業の特色である。乱獲を抑えたり、姫島で魚が獲れない時期に旅漁で生活を支えていた慣習である。

6 総括

本研究では、大分県姫島村を対象に、集落における現在まで継承された、生活・生業に関する規範意識や慣習等の社会関係資本の整理・分析を行った。これらを【生活】、【土地・家屋】、【産業】の3つの分類に分

けて、内容をまとめた。**【生活】** 姫島では、慣習や祭事によって、住民同士の連帯感・仲間意識を深めていたことがわか

る。また、これらに関する社会共通資本として公民館が挙げられる。以前は若者宿として、現在は各地区の交流の場として、現在まで継承されている。

【土地・家屋】 長男が本家を継ぎ、次男以降も島内に家を建てることができた。また、財産は本家と分家で折半するが、交際費等は軽減されるため、暮らしやすい環境にあった。これにより、島内に世帯を増やしていったと考えられる。

【産業】 島独自の漁業に関する規制により、漁場を守ってきた。また、長男子相続の意識と、家族での漁業形態により後継者を確保してきたことがわかった。

今後は、本稿で明らかとなった姫島の社会関係資本と関係ある社会共通資本を、集落構造の変容過程により分析することで、日本の集落におけるサスティナブルコミュニティの要件を導出する必要がある。

【補注】

- 注1) 【基本属性】：離島の基本的な要素となる項目（人口・世帯数）、【生活基盤】：交通インフラや教育、医療、福祉等の生活をするうえで重要な要素となる項目（教育施設数・総生徒数・医療施設数・医療従事者数・就航回数・道路整備率）、【産業構造】：従来、生活の主体としてきた第一次産業や、近年増加傾向にある観光業等の項目（農業生産額・水産業生産額・観光客数・宿泊可能人数）、【行政施策】：離島を運営する地方自治体の指標となる項目（歳入・歳出）
- 注2) 「第8号漁業暫行規程」により、魚の種類ごとに漁を行ってよい時期を定め、乱獲を抑えている。明治37年から文章化され、期節は毎年行われる漁期による絵巻で決定される。
- 注3) 姫島独自の言葉であり、姫島を離れ、他地区で漁業に従事すること。

【参考文献】

- 1) 山村宗一郎、佐藤祐治、小林祐司「集落構造の変遷にみるサスティナブル・コミュニティの理想」大分大学大学院工学研究科建設工学専攻博士前期課程修士論文、2011
- 2) 大堂麻里香、姫野由香「集落構造の変容にみるサスティナブル・コミュニティの理想に関する基礎的研究」大分大学大学院工学研究科建設工学専攻博士前期課程修士論文、2017
- 3) 離島統計年報6版(昭和50年版(1976年)、昭和55年版(1981年)、昭和60年版(1986年)、1990年版(1990年)、1995年版(1996年)、2000年版(2001年))、日本離島センター
- 4) 離島統計年報CD-ROM版3版(2005年版(2006年)、2006年版(2007年)、2015年版(2016年)、日本離島センター
- 5) SHIMADAS (1993年)、【Shimadas】編集委員会編、日本離島センター発行、1993年
- 6) SHIMADAS (日本の島ガイド、第2版)、日本離島センター編、日本離島センター発行、2004年
- 7) 各自治体における情報開示のURL
- 8) 山崎義人、橋本大、重村力、山崎寿一、杉野香織、上野浩一「人口増加を続けてきた坊勢島の居住システムの考察、日本建築学会計画理論論文集、第612号、57-62、2007年2月
- 9) 山崎義人、橋本大、重村力、山崎寿一、杉野香織、上野浩一「坊勢島におけるライフステージに応じた地域・住居システム」、日本建築学会計画理論論文集、第616号、85-90、2007年6月
- 10) 山崎義人、杉野香織、重村力、山崎寿一「ライフステージに応じた坊勢島における女性の交流の特性・人口増加を続けてきた坊勢島における地域社会の特性に関する研究」、日本建築学会計画理論論文集、第624号、341-347、2008年2月
- 11) 山内昌和、福岡県小島漁業コミュニティにおける世帯再生産メカニズム」、地理学論 73A-12、835-854、2000
- 12) 安食和広「北上山山奥地山村集落における世帯の構成とその再生産プロセス」、地理学論 66A-3、131-150、1993
- 13) 宮本常一(1970)『日本の離島 第2集』株式会社木村社
- 14) 和歌森太郎(1960)『くさきき-西日本民族・文化における地位』吉川弘文館

*1 大分大学大学院工学研究科博士後期課程
 *2 大分大学工学部福祉環境工学科
 *3 大分大学大学院工学研究科博士後期課程
 *4 大分大学工学部福祉環境工学科

大学院生
 助教 博士(工学)
 大学院生
 学部生

Graduate Student,Oita Univ.
 Research Associate,Dept. of Architecture, Faculty of Eng.Oita Univ., Dr.Eng
 Doctoral Course ,Oita Univ.
 Undergraduate Student,Oita Univ.